

昭和二十五年六月十五日發行（毎月一回十五日發行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

（通第十四号）

見佛所得の功德により
衆生の煩惱恶心を破壊す
社

說（1）

法水満々たり………花田正夫（3）

釋尊の降誕を祝して………白井成允（6）

次
目
信味點滴………（12）

第一卷・第六號

慈光

見佛所得の功德により 衆生の煩惱恶心を破壊す

（社説）――

我々は常に相対五分五分の虚偽の心しかないの、何時も

何時も惡の方へ負けてばかりいるのであるが、煩惱具足の身として、全くそらあるより外、ありようのない、その必然の結果として、地獄・餓鬼・畜生の三惡道に墮する外にないことを、佛の明らかな御智慧で照見されて、それが如何にも痛ましいことである。不憫なことであると、御自身に深く体感して下さつて、身より體にとおる大慈悲心をもつて、一子の如く憐憫される佛の御眞実が、一度我等が身に徹到する時、破壊と建設が同時に完成され、新生の光を初めて仰ぐのである。破壊とは自我中心の自力我慢の心の崩壊であり、建設とは徹底した懺悔の中から佛心がおのずとその人の願となつてあらわれるのである。

この最も鮮やかな実証を阿闍世王の入信に於いて見ることが出来る。青年阿闍世は早く王位について思う存分の生活がしたくてならなかつた。そこに佛陀の教團を我が配下に入れようと野心に満ちた提婆達多がうまく喰い入つて、父王頻婆娑羅の舊惡を暴露した。阿闍世の貪欲の心は狂乱して遂に父

王、佛にもうさく

「世尊、もし我あきらかに能く、衆生の・もろもろの・惡心を・破壊せば、我をして常に阿鼻地獄にありて、無量劫の中に、もろもろの衆生のために大苦惱を受けしむとも、もつて苦となさず」

無根の信を獲たりと歎びにふるえて、佛にもうし上ける阿

闍世の心中は「自分の・よくな・大逆の・悪人は・大地獄におちて何時までも大苦惱をうける外ない者である。斯る大悪人を常に慈父母となり、一子の如く憐憫して下さるは佛以外にはましまぬ。世間に自分の味方をもとめていたことが、自分の大惡を棚に上げた全く虫のよい大橋慢心であつた。かかるあさましい自分にきづかせて頂くと、佛におい出来たことでもう大満足であります」と随喜の外はなかつたのである。

この「見佛所得の功德」は阿闍世王が終生佛法の外護者としての大活動の源泉であつた。そしてマカダ国の人々をして無上菩提心をおこさしめ、あらゆる衆生の惡心を破壊する大光明となつた。然も王自身は「常に大地獄にあつて無量の歲月を衆のために大苦惱を受けしむとも苦となさじ」との大勇猛心と言うか、大慈悲心と言うか、そのことにおいて佛の御眞実心一つで大満足して何一つ求むることなき清淨な心に住している。

大いなる確信と、大いなる決意、何をも崇高にして偉大なる志願であろうか、最早阿闍世王の前には、それを障害する何人も無い。聖徳太子の「人はなはだ悪しき者はすくなし、

王を獄中に幽閉致死せしめた。

其後阿闍世王は遂に大懺悔に入り、善友耆婆大臣に導びかれて佛陀の廣大な大慈悲心にあい、初めて新生の光を仰ぐと、踊躍歡喜して

「世尊、我世間を見るに、伊蘭子より伊蘭樹を生ず。伊蘭より栴檀樹を生ずるものを見ず。我今はじめて伊蘭子より栴檀樹を生ずるを見たり。

伊蘭子とは我が身これなり。栴檀樹とは即ちこれ我が心の無根の信なり。無根とは我はじめより如來を恭敬することを知らず、法僧を信せず、これを無根となづく。

世尊、われもし世尊にまうあはずば、まさに無量阿僧祇劫において、大地獄にあつて無量の苦を受くべし。

我今、佛を見たてまつる。この見佛所得の功德をもつて、衆生の煩惱恶心を破壊す」

佛のたまわく

「大王、善い哉、善い哉。我今、汝必ず能く衆生の惡心を破壊することを知れり」

よく教ふるをもて從ひぬの御精神も、これに通うところである。元來障害は向うにあるのでなく、自分の内にある。話してもわからぬ人間だと見ることが、己は善しとする慢心である。自分は地獄より外行きようのない大悪人なりとの大懺悔に立つ者、そこには話せばわかるの道が如來の御はからいとしてひらける。

佛陀もこの阿闍世の心をよみし給うて「善い哉、善い哉、我今、汝必ず能く、衆生の惡心を破壊することを知れり」と印可されている。

茲において相対五分五分の惡に負けてばかり行く、煩惱具足・罪惡深重の者が、佛の本願一つで、悪にくだけず、惡を碎き破る無限の力をめぐまれるのである。即ち相対五分五分の世界にあるまんま、佛の絶対力に五分五分をとろけさせて頂き、とろけさせて頂きことによつて、今度は相対五分五分の世界において存分の働きをさせて頂けるのである。この妙消息を眞に身をもつて解つて下されば私の願はつきるのである。

思うに、相対界で存分の働きの出來ない信仰であれば、その信は不徹底である。金の鎖でしばられた、邊地懈慢、疑城胎宮の未熟な相対的信にとどまる證據であつて、ここは細心に注意しなければならぬ。これというのも彌陀佛の本願一つに闇の一切が破られ、一切の志願が満たされていいからだ。言いかえると如來のよくしろしめすように心をもてないで、人によく見て貰いたいとの毒々しい名利心がそのまま残

り、所謂佛法者、後世者ぶる心、即ち外に賢善精進の相をしめしつつその非を自覺出來ない所に病根がある。

よくよく反省すれば、自分のような極悪人の心中をそのまま授け出したら、親でも兄弟でも親友でも恩師でもあされはてられる人間である。かかるあさましい自分が人によく思われよう、味方を得ようとと思うことが全く身の程知らぬことで、彌陀一佛ましまして、罪惡深重・煩惱熾盛のわれらをたすけんとの大悲大願をおこして下されたのは、これはこちらが價値があるからではない、全部悪い全く浮ぶ瀬のない、罪業にまつわられて一分一厘どうにもならぬ者だからこその大悲、常照の慈光である。

歎異抄の「しかるに佛かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫いづれの行にても生死をはなることあることなき」と仰せられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」のところが大切である。彌陀佛の大悲大願はこの地獄一定よりほかありようのない私のためであつたと体解させていただきとこころに、やすらぎとやわらぎの源泉であるたのもしさをおぼえるのである。これが阿闍世王の見佛所得の功德である。現在のわれらから言えば聞佛所得の功德と言う方が穏当であろう。聞佛といい見佛というも皆佛心にあうこと、佛の眞心の徹到することである。そこに「念佛者は無碍の一道なり」と自然に味わうことが出来るのである。

波岡茂輝氏遺詠

暗あればこそ光明の尊けれ

暗なしにして何の光ぞ

汚れたる身にしあれども淨めをそぐ

水絶えざれば我はやすけし

おのづから吾が行く道はまだまれり

その一筋をゆくべかりけり

人の世のいと尊きはことん々く

念佛の中にありにけるかも

念佛の行者を一人朋に得ぬ

この喜びを何にたとへむ

おのづから心はうちにかへりけり

世とほとほとに絶ちてしをれば

法 水 滿 々 た り

花 田 正 夫

鎌倉時代、道元禪師が、求法の一念に燃えて、支那にわたり、如淨禪師のもとで参禪して居られた時、修道のすこしのひまをも惜しんで、古今の高僧の語錄をうつしていたのを、高足の弟子の一人が

「何のために忙しそうに書写するのか」

とたゞすと、道元禪師は

「自分は遠く日本からの求法者であるが、これを土産として持ち帰り、自分も後年色々と味到したいためである」

と答えると

「迂闊なことだ。そんな他人の味到したカスを持ち帰つて一体何になるか。そんな暇があつたら只座するのだ。只座、只坐、如法只坐、そこに汲めども汲めどもつきぬ、使つても使つても使いきれぬ無盡の法水がある。何のいとまあつてか、そんな面倒臭い閑事をして、またとない尊い時をむだづかいするのか」

と大喝せられると、道元禪師は

「黙して懲す」と、ゲットつまつてしまつて、答える言葉もなく、涙と共に大懺悔して、それからというものは、只

私はすつと前に禪師のこの逸話をきいて、非常に心をうたれ、今もなほ心の底にきざまれて灑々たるものがある。もとより如法只坐などは私の及びもつかぬことであるが、四十七歳の今日、道元禪師のこの故実を、何の羨望もなく「ただ念佛」の一つに、自然法爾、義なきを義とする本願の念佛一つに、法水満々、洋々として大水の如く、汲めども使えどもつきぬ功德の大海水を頂戴するのである。これ一つで世間と出世間の萬事を解決させて頂いてありますところがない。

○南無阿彌陀佛をとけるには

衆善海水の如くなり
かの清淨の善身にえたり

ひとしく衆生に廻向せん

選擇本願信すれば

不可称不可說不可思議の

功德は行者の身にみたり

身にえたり、身にみてり、とは何たる不可思議であろうか、何たる有り難い極みであろうか。「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」とつねにつねに信証され、渴仰され、隨喜されたところである。

もともと彌陀佛の本願が「廣く法藏をひらいて、凡小をあはれんで、選んで功德の實をほどこすことをいたす」にあり。釋迦佛の出世の御本懐が「道教を光闡し、群萌をすくひ、惠むに眞実の利をもつてせんと欲す」にある。凡小とは我等が身にみち／＼て、臨終の一念まで、きえず、とどまらず、たえぬをいふ」群萌とは「無始よりこのかた今日今時にいたるまで、穢惡汚染にして清淨のこころなく、虛偽詔偽にして眞実のこころなき者」のことである。煩惱をかけめなくそなえた、悪から惡、苦から苦、暗から暗に入るわれ等のことである。かかるあさましき身に、無上甚深の功德、眞実にして不虛の大利益をめぐまれて、一切の無明のやみがやぶられ、一切の志願が満ちたりるのである。

嗚呼、偉なる哉、南無阿彌陀佛。嗚呼、大なる哉、南無阿彌陀佛。言語にこえ、思議をたつ。不可称・不可說・不可思議の南無阿彌陀佛。至徳まどかにとろけ、萬行自在にそなわる。親の心子知らずとか、凡愚迷妄の私はかかる御生命を

議の南無阿彌陀佛。至徳まどかにとろけ、萬行自在にそなわる、嗚呼また何をかいわんやである。

思えばながいながい年月、煩惱具足の身、いつれの行にても生死をはなるることあるべからざる身、地獄は一定の身と眞に信知せず、徒らに先師の語錄のみをもてあそんで、南無阿彌陀佛の本源をはなれていた。法味のカスを後生大事に記憶して得々とし、眞似事のみにかかりはてて、一度去つて二度と歸らぬかけがえのない自己の生命を空しく徒らにすごし去つたことである。如來本願の意趣を知らず、多岐亡羊の枝末にかかりはてて徒勞して來たことよ。

耳をたつればなつかしや、あなたこなたの木がくれに、鳴く音をもらすほととぎす。けに聖人はかかる私共のゆえにこそ、切々哀々として悲心うむことなく呼びかけて下さつている。「穢をして淨をねがい、行にまどい信にまよい、心くらくさとりすくなく、惡おもく障り多きもの」とお示し下され、「殊に如來の發遣をあふぎ、必ず最勝の直道に歸して、専らこの行につかへ、唯この信をあがめよ」と全身全靈をあげて呼びかけて下さつてゐる。殊に・必ず・専ら・唯・（唯）いうはそのこと一つといふことなり、二つならぶことをきらふなり」とのきわだつた切々たる御勸化は全くなみなみならぬ御心である。全く御身をおすて下さつて大地に土下坐されたの御願いである。これ一つがひらけねば人類は永遠のやみではないか、三千世界に光が消えてしまうではないか、

かけての御心をなみして、法にそむき、佛を殺し、しかも死ぢろう心もなく、一つよりない自己の生命をも徒らに送り空しく過してちつとも惜まず、謗法の徒、闇提の輩、全く逆誹の死骸である。かかる私の故にこそ南無阿彌陀佛の本願はましますのである、かかる私の故にこそ阿彌陀佛は親鸞聖人と應現して下されたのである。

南無阿彌陀佛

ゲ　　一　　テ　　語　　錄

- ・外国のものを翻訳する時には、「どうしても訳せない」と云う處まで行き詰らなければいけない。そこで初めて外国の思想と言葉とを體得することが出来る
- ・自分の所へ来る人を見て其の人の性質を知ることは出来ぬ。人を見抜くには自分がその人の所へ行かねばならぬ
- ・天が奇いということを理解する爲には、世界を一週して見る必要はない
- ・自分が一度言い出したのだからいつまでも間違つた事を固守せねばならぬと言うそれだけの考を捨てさえすれば丸で別な立派な人間になれる人が沢山あるのに
- ・自分の身は小さく限られたものであることをよくわきまえた人は最も完全に近い人である
- ・実行家は誰でも世界を自分の手で左右しようと思んで居る、思想家は誰でも世界を自分の頭で統一しようと欲している。それがどの程度まで成功するものかはなかなかの觀物である

釋尊の降誕を祝して

白井成允述

今日は四月八日でお釈迦様の御誕生日であります。古いお經の阿含經を拜読すると釋尊の誕生のことが色々記されております。その御經には釋尊が御誕生になつた時天地に満ち満ちた大きな光が現われた、遍く光がゆきとどいて星の蔭になつてゐるところまで照り輝いて天人や諸々の人間ばかりでなく悪魔の輩まで光を仰ぎ湧躍歡喜して天地と共に躍り上るよう喜んでいたと記されてあります。御誕生された時光が満ち輝いたことをこの四月八日のよき日に反省していただきたいと思ひます。光が現れたということは闇があつた事であります。闇の中にいたからこそ本当に光明を喜ぶことが出来たのであります。暗から光明に轉じて往く、こういうことをまことに尊く思いますので今日はそういうことを感じてお話をしたく思います。

釋尊が永い間の苦行を経て佛の悟を開かれた時、そのさとりを世の中に傳えんとして麓野苑に五人の比丘を尋ね説法をされました。即ち四聖諦で四つの尊き眞理であります。苦聖諦・集聖諦・滅聖諦・道聖諦の四聖諦が実に釋尊五十年の說法の根本に横つてゐる眞理であり、印度支那日本と傳えられ

が戦争をすることによつて親は子と妻は夫と兒は親と別れる苦しみで、毎日毎日のラジオの尋ね人の時間聞くと胸が苦しくなります。こんな苦を云います。又怨み合い憎みあう者が会う世界が怨憎会苦で、これはソビエト・シャンタ・アメリカの対立が私共に大規模に示してくれる、資本主義の国家と共産主義の国とが平和を乱して地球上に時と處を共にしてにらみ合つていてことを思えば釋尊の説かれる怨憎会苦をあじわざるを得ない。欲しいものが得られない求不可得苦は私共の生活の凡ゆる面に於いて沁み沁みとあじわわされる。五取蘊苦は私の感覚の欲が豊かに満たされるということも入つてしましよう。ラジオの歌をきいても感覚の慾が限りなく満たきていたく世界もあるが、それが却つて道徳的に罪悪を伴つて穢れ世界へ我々を導いていくのであります。

佛様の教を聞くと最初は、私共の生活の在り方をそのままに見ていく。ごまかさずに少しでも覗いていくと人生は苦であるということがいかにもそうであると肯かれてくるのであります。人生にいろいろの苦の有様があるということは否めないがその反対に樂しみがある、病氣の反対に健康がある、老いの反対に青春の快樂がある。苦の一面のみを見るから佛教は消極的になつていくといふ人もあるがお釈迦様の御眼から見られればそれらは感覚の欲の積つたものだ、佛様の境界から現実を見ると苦としか見えぬのでしよう。例えば子供が健康で生長してゆくのを見ると樂であるが邪見になるとか喧嘩をしたりして世間に禍いするようなことを見ますと親の胸

て來た佛教全体の歴史はこの眞理を彰かにして來ているのであります。我々の人生は苦であるということから語り始められ、その苦のよつて来る原因を見、その因（集諦）果（苦諦）を減して佛の境界が開け、その境界に歩んでいく方法を道聖諦に示めされた。苦集の兩聖諦は人間生活がどういうものかその様相を彰にされ、滅道の兩聖諦はみ佛の悟の境界を明かされたもので迷つてゐる凡夫を佛の境界にお導き下さるみ佛教であると教えられている。我々の境界は迷いのよくよく積つた暗い世界であり、佛の智慧が満ち溢れ光明が照り輝いている境界を示されたのが四聖諦であります。親鸞聖人もこの四聖諦を教えて下さるに違いないのであります。四聖諦をもとにして宗祖の教をあじわわさせて貰おうと思うのであります。生きるとは苦しみであり、生れたものは年をとつてく老いの苦、のがれられぬ病の苦、又おそかれ早かれ死んでいかねばならぬ死苦、これが四苦で、それに愛別離苦・怨憎会苦・求不可得苦・五取蘊苦（五陰盛苦）の四つが加えられて八苦と云われてゐる。このようなことは現実生活に離れることが出來ない状態であります。愛別離苦、これは例えれば私共

ようになることが佛教を聞くことでありましょう。人間はいろいろの楽しみをして一生を閉じてゆくのであります。何時でも安らかに死ねるといふことがあります。死のまぎわになつてこんな生き方をしたといつて煩悶が出てくるのではないでしようか。お正信偈の「一生造惡值弘誓」一生惡を造つて來たというお言葉、そういう生涯だけでよいのであります。本願を説かんためにあらわれた、それなら貴方がたが世に生れたのは何のためか、これを知らぬのでは一生涯を無駄に過してしまうのではないか、それは「唯聽彌陀本願海」唯彌陀如來の本願を聞くことであります。これを聞けばおのずと分り聞かねば結局一生を無駄におくるのだろう。釋尊は我々に本願をしらしめんために生きられた、ところが何故彌陀の本願を聞くことが根本の問題なのかと申しますと、それは一面に於て我々のいのちがどういうものか自分のいのちの眞実の在り方をしらせて戴き、このいのちを永遠に安んじさせて下さるからでこれが釋尊の御本意であります。何だかごてごてして参りましたが、苦のことを話しているつもりであります。親の心を知らず我々が迷つてゐるこの有様を佛は苦と感じて下さる。子供の病を見て母親が苦しみ子供の邪見になつてゆくのを見て親は苦しかった。懊惱を佛様の方で悩んで下さると釋尊は教えて下さいました。涅槃經によれば「慈悲隨喜」の誓をとつてとかれてあります。慈隨喜とは

の如し」の御文があります。私が拜む時いかにも私が佛に頭を下ゆてゐる様ですが実は佛様の方から私に近寄りて来て下さいます。母牛のあとから仔牛がつきまとうて行くよう何處までも我々を追いかけてこられます。勝鬘經に「若し衆生有つて如來に調伏され如來に歸依すれば法の津沢を得て信樂の心を生ず」とある。ここに如來に調伏されるということがあるのである。私が善くなつて如來を拜むのではなく如來が私の心を平にして下さる。調べ從わされて始めて拜ませられるのである。佛法を誇るような人を見て自分は佛法を信じていると高慢な心がおこるのであるが、法の津沢を得てといふことが頂かれねばならぬ。津とか沢とかは水が絶えずあるところで急に水が流れ去つてしまふところではない。法の慈悲が津沢の様にじめじめとうるおして下さるのである。信樂の心のおこるのもお見捨てなき慈悲がとどいてくるからでありましよう。仔牛はお母さんの親牛を追つて離れないように佛様が私に従うて離れて下さらない。この御苦勞が心に浸み透つて来て下さる。私について離れないところが佛の境界でその佛がが私の有様を苦と見られてゆく。こうして苦の言葉を味つて私に従つて離れて下さらない。この御苦勞が心に浸みついて来て下さる。私について離れないところが佛の境界でその佛はなく滅の境界にいられるから始めて私共の境界を苦と見そなわされるのであります。

苦とは何に因つて、そう感するのかどうか、その原因を明るい
れるのかこの集聖諦の教であります。我々の根本には無明の
煩惱があるためであります。ものを知るという働きがら云え
ば眞理を明らかに知らない無明、眞実の智慧を持つていないと
から迷うので道に迷ひたおこないや考が出てくる、だから無
明が苦をここに感じてゆく。感ずる面から云えば「渴愛の煩
惱」というのである。飢え渴く如く慾着するということであ
る。この人間界に五尺の肉体を現してこれが自分だと思つ
ているが、父母を縁として祖先の血潮をうけついで來ている
のであり乳や米の恩恵によつて即ち宇宙に満ち満ちている大
生命が宿つているのである。

佛のいのちは一切衆生から切り離すことが出来ない。仁と
いう言葉はいつくしみなさけ深いという言葉であります。が、
四海同朋で見知らぬ人であつても同朋と親しく懷しげ者を仁
者というのであり「不仁」とは手足の麻痺している人を支
那では云つています。無感覺になると自分の手足が判らなく

をニルバーナという。無明の煩惱が滅び智慧の光明が輝くの
である。自分さえよければ他はどうでもよいという我儘の心
が滅びてしまつたから廣い慈悲の状態が出てくる。智慧と慈悲
悲とのお境界が、滅の境界であります。佛のお悟りの限りな
き智慧と慈悲とこれを最もよく現しているのが阿彌陀佛とい
うお名である。お正信偈の始めに「歸命無量壽如來南無不可思
議光」とあるが南無阿彌陀佛を二つに分けて無量壽如來に歸
命し奉る不可思議光に南無し奉るとされてある。あれはお名
号のふくんでいる意味をわけて現された。我々いのちあるもの
のに根本に尊いものは限りなきいのちを與えて下さることで
ありましよう。限りなきいのちは如來様のお働き。光明は無明
をはらす智慧のはたらきであります。この二つをお恵み下さ
る南無阿彌陀佛という御名号を我々の前に現わされている。
名号がしみこみ働きこんで下さる。これが御佛の御力である。
滅聖稱はこう我々に示して下さいまえ。

佛のいのちは一切衆生から切り離すことが出来ない。仁と
いう言葉はいつもしみなさけ深いという言葉であります。が、
四海同朋で見知らぬ人であつても同朋と親しく懷しむ者を仁
者というのであり「不仁」とは手足の麻痺している人を支
那では云つています。無感覺になると自分の手足が判らなく
なる。他の人が苦しんでいようがいまいが平氣でいる。これ
を「不仁」といつてゐる。仁者の心は四海同朋で凡ゆる衆生
の悩みを自分の悩みとして感する。我々は渴愛の煩惱に縛ら
れて他の人のことはしげれてしまつて感じない状態になつて
いる。だからいろいろの苦がおこつてくる。煩惱のために不
斷に苦がおこつてくるのです。

ありましよう 限りなきいのちは如來様のお働き光明は無明をはらす智慧のはたらきであります。この一つをお恵み下さる南無阿彌陀佛といふ御名号を我々の前に現わされてゐる。名号がしみこみ働きこんで下さる。これが御佛の御力である。滅聖話はこう我々に示して下さい。

第四の道聖話とは我々が如何にして滅の涅槃の世界に達するのであらうか、佛の境界になつて一切の衆生を救うて行くのが理想であるがそれにはどうしてなるのか、道聖話といふことは迷える我々が佛の境界に至るの道であり佛が我々凡夫に通つて下さる道であります。迷いの者は悟りへの道、悟りの者は迷の中に入りこまれる道これが限りなき道であります。八正道の根本は正見であつてこれが第一のことに出発点がなつてゐる。これは佛の仰せを正しく信じることに出发点が

ある。故に聖德太子が十七條憲法に篤く三宝に頼り奉る道をお示し下さいました。併し法に帰依し僧に帰依するだけでは足らぬ、佛を信ずることが第一だと教えられている。即ち阿彌陀佛の御呼び声を聞いてゆくことによつて八正道の根本の立場が南無阿彌陀佛と称名に現れて下さるのであります。

釈尊がこの世に現れ給うたのは彌陀の本願をとかれんが爲に四聖諦八正道を丁寧に教えられたとうかがわれるのです。八十年の間の御苦労は我々の一人一人に南無阿彌陀佛の教を聞かしめんためである。迷いは煩惱から現われこれをなくした消えた境界が滅聖諦の立場であつた。この道程を宗祖親鸞聖人が南無阿彌陀佛の言葉の中に含まれると教えられた。名号の中に一切の佛の教がおさめられるのであります。

四月八日の釈尊の誕生日に當つて佛陀は何時も何時も名号としてひびき我々の心の中に常に誕生して下さる。そういうことをこの時間に申し上げたのである。本願を聞くということが名号を称えることであります。五分間休ませて戴きます。

前の時間にはお釈迦様の誕生にちなみまして、四聖諦に連関して多少申し上げたのであるが、親鸞聖人が、如來所以興出世、唯說彌陀本願海とお示し下されたのですから、我々としましては、この世に生れた所詮として唯聽彌陀本願海ということになるのでありますから、

前と連関して申しますと、苦聖諦が歎異抄の中に「そくば

くの業をもちける身にてありけるを」という言葉であらわされている。「いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と親鸞聖人が御自身をかえり見て仰せられている。即ち苦聖諦を聖人のいのちの上にいただからです。

善導大師は「自身は現に罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかた、つねにしづみつねに流轉して出離の縁あることなき身とされ」を深信せられている。印度・支那の高僧の方々は釈尊は何を説かれたかと身を以て聞かれ、その方々は一様に善導大師のように信じられたことと思う。佛の悟りを開く智慧も慈悲もないものだということを高僧方は自覺してこられたと思う。善導大師は「常にしづみつねに流轉して」はかりないはるかな彼方から流轉して來た、煩惱に迷い財力に穢れたといふかんじをもつて居られた。佛教は常に因果の道理に照して見る教えだからこういわれる。善導大師や親鸞聖人はこの凡夫の姿を迷いのものであると告白し歎いて下さいますが、それは昨日や今日起つたのではなく限りなく遙かな昔から、何れの世においても穢れの身で、どうすることも出来ない因果の嚴肅な法を考えていられる。因果の道理に照らして淨土に対して地獄があり、凡夫に対しても佛があるとなる。因果の道理を撥無するは外道であります。

三世に恒るいのちの姿、ここに佛様の親切な教がある。苦聖諦・集聖諦と我身にあてて省る時、善導大師の「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみつねで、何れの世においても穢れの身で、どうすることも出来ない因果の嚴肅な法を考えていられる。因果の道理に照らして淨土に対して地獄があり、凡夫に対しても佛があるとなる。因果の道理を撥無するは外道であります。

すには居られないと仰せられる。その呼び声が南無阿彌陀佛で、この悲しみの中に聞くのである。今までには不眞面目であるから眞面目にならなければいけないのだと思う。佛の眞面目に出来ないのであるとの仰せを聞くと、眞面目になろうとするのは大それた事で、むしろそう思うのが間違いであります。不眞面目であればあるほど親様がある、この親様がどのようになつても導びいて下さるから安らぎがあるのです。その御慈悲に攝取せられて、南無阿彌陀佛と称えつゝ安らいで行く。そこに必ず救うという呼び声が聞えて来る、これが佛法を聞く眞髓であります。

この法を不斷に聞かされている私共は、今日の時勢について特にいろいろと感ぜさせられる。その一つを申し上げると。一体佛教の根本と申しますが、特に日本佛教の祖、聖德太子様は「佛乗」という言葉を用いて佛教の眞髓をあらわされました。二乘三乗の区別なしに、学問のある者も無い者も、善人も悪人も均しく佛の悟を開かせて頂く、こういう佛が「佛乗と申すのであります。乗は乗物、迷の岸にうごめいている凡夫を佛の境界に連れていつて下さる乗物のことです。この乗物が二つも三つもある不平等の世界禪ではなく、南無阿彌陀佛という一つの信念によつて等しく悟を開かせて下さるところに名号があります。

このような考の一つの例を當不輕菩薩に見るのです。この菩薩様は文字の読めぬ方であります、常に他に向つて「私はあなたを敬い申し上げます」と合掌せられた。こう言

われる人々の中には、そんなことを言つて貰わなくてもよい
という人、或は石瓦を投げつけた人もありました。そのよう
な人に對しても佛の悟をひらく方々だから敬い申し上げます
といつて合掌せられた。私共は常不輕菩薩のような行はもと
より出来ません。まして自分を迫害する人々をも敬うなどと
はとても出来ませんが、菩薩の心、いいかえれば、自分を如
何に迫害する人でも、その人の中に佛性をみとめ、將來の佛
になる人だと頂かれている。こゝに今日やかましく言われて
いるデモクラシイの事を思うのですが、西洋流のデモクラシ
イは二元対立の功利主義である。これは利益を追いつつ妥協
して行くのであるが、いのちの深いところに敬い合う、こゝ
に人権の平等もあり得ると思う。そこに佛の大きいやわら
ぎの世界を味つて行きます。

聖德太子は日本佛教の課題として「佛乘をかゝげられた。
道元・日蓮・親鸞の諸師はその課題に向つて歩んでいかれ
た。親鸞聖人はことに誓願一佛乗の理想を本当に私共の身に
あかしすることを教えられた。「阿彌陀の誓願不思議にたすけ
られまいらせ」と、南無阿彌陀佛一つで平等に救われて行
くことをあかしせられた。我々の如く愚な者に念佛として味
わさせて頂く。聖德太子の理想を親鸞聖人は念佛の絶対の道
に示された。不眞面目な姿を「佛かねてしろしめして煩惱具
足の凡夫」と仰せせられ、そのまゝに捨ておけぬと呼ばれる中
に佛の世界に救わられて行く道が開かれる。我々はこの誓願一
佛乗を歩ませて頂く、これが聖德太子の理想を聽いて行くこ

とだと思います。にくむまいと思つても生命のある間はにく
み、うらまざるを得ないのが我々で、かゝる惡業煩惱の者を
捨てぬと誓われるお慈悲を聞いておまかせ申し、佛様の御苦
勞を偲ぶのであります。この故にこそ御苦勞があつたのだと
南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と和らぎと安らぎを惠まれて行
ます。

もう一つ例を申し上げましよう。淨土真宗の教を聞くと
淨土往生のことばかり説いて、悪くてもよいのだと言つて現
実を軽く見るから聞きたくないと学生が私に申しました。こ
れを聞いて私は近頃特に感じていますことは、佛の慈悲を聞
かされているものは佛の願によつて生かされているものであ
る。佛の願をおのれの願とするのではないでしようか、私を
救つて下さる佛様の願を自分の願として行く、本当にきかせ
て貰えばその千万分の一でも実現させて頂くのが親様に対す
る子の願であります。佛の四十八の願を自分の願とも味
つて行くのです。こゝにこの世に生きる私の所詮もあるので
はないでしょうか。これでよいのか皆様にお伺いするのです
が、今日はこういう風に感じていることを告白するにとどめ
ておきます。

四月八日の佛陀御誕生の日に皆様にお目にかゝつた御縁を
有り難く思つて話を終らせて頂きます。

文責編輯者

信　味　點　滴

眞の孤独に徹するとき、孤独はなくなる。孤独々々という

ている間は愚痴である

独生独死・独去獨來とのらせ給うた佛陀はそのまま安らい
と和らぎに住していられる

空じや空じやは空ではない。空に徹する時、空がなくな
る。空が身についた時だ

教が身につく、体解するとはこういうことを言うのだ

歎異抄、歎異抄といつていていた間は、実は歎異抄はちつとも
領解されていなかつた。さづばりわからぬ盲者であつたと頭
の下つたところ、歎異抄が光の海のように輝き出た。摩訶不
思議である

否定論者が多い。どちらもそらごとたわごとである

あらそいはもとよりわろし、わろけれど、わろしといふもま
たわろきなり

左立てれば右立てたず、右を立てれば左が立てたず、兩方立て
ればわが身が立てたぬ

立たゞわが身と頭がさがりや、自由自在のおはからい
御恩の初めが南無阿彌陀佛、御恩の至極が南無阿彌陀佛、
御恩の終りも南無阿彌陀佛

法　句　經　意　譯

いつわりを、まことと思
まことをば、いつわりとせば

あだのねがひを、たどるべし
まことをば、まこととしりつ
いつわりを、いつはりとせば

やがてまことをさとりえ
たゞしき道をみみ行かむ

煩惱肯定主義者は鬪争に終り、煩惱否定主義者は遂に僥幸
者を暴露する。西洋の自然主義者は肯定論者であり、東洋は

編集後記

社説として、聖徳太子感法の「惡をこらし
善をすすめる」根本の力が、見佛所得の功德
として與えられる事を述べました。

惡を碎く力は惡に碎かれぬところから出で
来ます。本願をさまたぐる惡の惡なきことを
信証せしめられる、本願念佛一つで満足させ
られる、ここ一つが要であります。

「法水滿々たり」は内外明暗をえらばず満
ち貫る大慈悲におどろき、且つは聖人がそ
の故にこそ大地にひまづがれて、哀々切々
として呼びかけて下さることで尊さに、胸う
たれて読みました。

「釋尊誕を祝して」の白井先生の御講話
は先生御自身が、「不眞面目より外ありよう
のない者」とすつかり頭を下げて下されての
上に、恰も泥田に浮かんで咲き満つる佛心の
種華を拜ませて頂いたことであります。「佛
心の種華はげに湿地の淤泥に開く」とは古今
の鐵則であります。

種如上人は儘に水を入れてもすぐもれてし
まうが、水中に籠を入れると水の方から飛び
こんで来て内も外も水ばかりとなると訓えら
れている

聞くときはさこそさこそと思えども、その

場を立てばあとかたもなし、とは聞きわけて
信じ得もののことであつて、信じ得ぬとは、自
己中心の自我（我執・我慢）が碎かれぬから
であり、頭を上げてゐるからである。生活の
全部が御慈悲ばかりとなり、そこから出られ
なくなる。人間が空氣の中に居て空氣から離
れられなくなる、それが心光照護というもの
である、そこに憶念の心がある。

先生の御講話の御姿にこうしたことを感佩
申したことである。

筆記は名古屋市的小笠原さんに御願い申し
ました。先回もそうでありましたが、御苦勞
様であります。厚く御礼を申し上げます。

最後に白井先生が、佛の本願をきく者は、
本願を願として生きるようになる、と誠に尊
い説を残して下さいました。この説が誰てな
くなるように切に願つてやみません。

昭和二十五年六月十日印刷
昭和二十五年六月十五日發行
毎月一回十五日發行
定價 一部金拾五圓（郵稅共）
一年分金百八拾圓（郵稅共）

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九
編集兼
發行人 花田正夫

名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷人 本 郎

名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷所 千草印刷所

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九
花田正夫方

名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九
振替口座番號 名古屋一〇四七〇番

光の子社は本年初めに遂に經營困難となり
解散いたしました。御迷惑をおかけした方々
もあると存じますが、誠に申し訣のないこと
であります。池山敏郎氏から深くおわびの
書状が參つて居りますことを附記させていた
だきます